

C. ピーター・ワグナーの回顧録

『ワニや預言者、神学者たちとの格闘 教会の中で生涯を通して学んだレッスン』—新使徒改革 (NAR) の使徒代表者 C. ピーター・ワグナーの回顧録

ジャッキー・アルノール (*Jackie Alnor*) による分析

<http://apostasyalert.org/>

これを読んだ読者が驚くことといえば、このワグナーの回顧録が神学の発展を見せ、教会に侵入してくるどんな流行さえも彼が取り入れているという点だろう。彼の霊性の中での“パラダイム・シフト”としてワグナーが誇りにしていることは実際、彼に聖書的な論拠が欠けているという事実を示している。この本を読めばこの使徒と呼ばれる人物がどのように現在に至ったかという洞察が得られる。ワグナーは自己評価において非常に正直に見え、宗教的なものすべてにおいてヒューマニズム的な態度を取っていることを隠そうとはしない。この本の大きい欠けていることは、神や主イエス・キリストの偉大さというクリスチャンの証、イエスを個人的な救い主として知ることが無かったという点である。この本はむしろ教会成長や学識、他の人への影響の中で彼が“キャリア”と呼ぶものの要約である。

この本には献辞は無いが、回顧録を出すべきだと提案した者の中にモーニングスター・ミニストリーズのリック・ジョイナー (*Rick Joyner*) がいたことを認めている。ジョイナーは偽預言者また悪霊の働き人として広く知られているが、ワグナーは彼を「現代キリスト教指導者の中で最も卓越した者のひとり...リックの後押しによって、この本を書くための聖書からの良い理由付けが得られた」と話す。また彼は第一テサロニケ 5 章 12 節を引用して、「パウロは私たちの中で労苦しているものを信者は認めるべきだと訓戒している」と書いている。(p.11)

この本はワグナーの称賛者たちの言葉で始まり、現代の教会史においていかにワグナーが尊敬に値する人物かという文章が記されている。その称賛者の中には IHOP の代表であるマイク・ビッケル (*Mike Bickle*)、エンカウンターズ・ネットワークのジェームズ・ゴール (*James Goll*)、クリスチャン・インターナショナル・アポストリック・ネットワークのビル・ハモン (*Bill Hamon*)、チャーチ・オン・ザ・ウェイのジャック・ヘイフォード (*Jack Hayford*)、ジェネラルズ・インターナショナルのシンディー・ジェイコブス

(*Cindy Jacobs*)、ベテル・チャーチのビル・ジョンソン(*Bill Johnson*)、エンドタイム・ハンドメイデンのグウェン・ショー(*Gwen Shaw*)、カリスマ・マガジンのスティーブ・ストラング(*Steve Strang*)など、カリスマ派の支持者たちが詰め合わされている。

ワグナーは自分自身で推薦の言葉を書いている。「私は新生した日からずっと神を恐れ、戒めを守ってきたと自信を持って言える。完全にですって？そんなことはない。...しかしすべてを通して私は神を恐れ、信仰を守り、レースを走り通し、私が最も強く望むことはいつでも神のみこころを行うことだった。私はパウロと共に正直に言うことができる。『私は天からの啓示にそむかなかった』と」

見栄えのしない証

彼は世界大恐慌を経験した自分の幼少期を語ることから本書を始めている。大学で農学について学ぶ前に農場で働き、牛乳を絞っていたと語る。彼はプロの団体競技が大好きだったと語り、彼のスポーツの知識は「聖書が語る霊的賜物と使徒的ミニストリーが実際どのように機能するかという理解を」容易にしたと語る。(p.19)

彼がキリスト教に回心したときの証は、将来の妻となったドリスとの出会いの中で語られている。ドリスはルター派の良い女の子だったので、彼がキリストを受入れるまでは結婚することを断っていた。そして彼女は「アッパールーム」というユナイテッド・メソジストチャーチのディボーション冊子を渡した。彼は「それからいくらかのキスで」もう心の準備が出来たと語る。「そして私はキリストを受け入れ、その農家でその晩に宣教師として人生を捧げた」(p.29)これが彼の語る新生の証なのである。

これは何と簡単に見えることだろう——悔い改めや聖霊による罪定め、福音への応答の必要も無いのだ。これこそある人たちが「安易な信仰観」と呼ぶものであり、ワグナーの教会成長法則の主要な基礎となっているのだ。

ラトガース大学を1952年に卒業した後、ワグナー夫妻は神学を学ぶために西部に移る。ワグナーはパサデナのフラワー神学校に落ち着き、ドリスはビオラ大学を選んだ。ワグナーがフラワーを好んだ理由としては「彼らが従来の枠組みに捉われずに考えようとするためであって、米国中の多くの根本主義の指導者たちを大いに悩ましたが、私には非常に魅力的に見えた...それによって古い皮袋より、新しい皮袋のほうが私のうちで光って見えたのである」と記す。

彼は当時“新福音派”と呼ばれていた団体に近づくようになり、他の福音派や根本主義者ら

を分離主義へのこだわりから彼らを律法主義者と見なすようになる。カリフォルニアに移った後、ワグナーはクエーカーの教派であるベル・フレンズチャーチのメンバーとなる。彼はそのクエーカー教派の者たちが信者の洗礼や主の聖餐に参加しないと語っているが、そのようなことはどうも彼を悩ませることがないようだ。

1956年にワグナーはボリビアで宣教師になるために母国を離れる。ワグナーは実際、フラー神学校でハロルド・リンゼル (*Harold Lindsay*) に教わったひとつのコースだけしか宣教師において正式な訓練を受けていないことを嘆いている (ハロルド・リンゼル：米クリスチャニティートゥデイの元編集者であり、この批評家の元教師)。ワグナーは神学的には保守派であったリンゼイのことを海外宣教の経験が実際には無く、他の者から学んだにすぎないと反論している。

ワグナーたちが南アメリカに移った時、「ケネス・ヘーゲン (*Kenneth Hagin*) やオーラル・ロバーツ (*Oral Roberts*) らが頭角を現し始めた」と語る (p.43)。彼らについて自分たちのサークルの中でワグナーが耳にしたことは否定的なものだけであったが、彼は過去を振り返り、もっと注目するべきであったと語る。特に繁栄の教えに耳を傾けるべきだったとしている。それはワグナーが当時、自分を“貧困の悪霊に支配されることを”許していたためであったという。彼がどのように貧困を悪霊と同定したのかは詳しくは触れられていないが、その暗示するところは誰でも貧しい者は悪霊につかれているというものだ。しかし前に触れたように、ワグナーは聖書の枠組みの外で遊ぶのが好きなのである。

この回顧録を通してワグナーは彼のキリスト教の奉仕を“専門職のキャリア”と捉えており、彼自身と他者の評価はユングの人格区分に基づいているように思われる。それは彼が4つの類型：楽観、陰鬱、不活発、短気などを用いて彼の強みや弱点を見ているからである。

彼は世界宣教会議を首尾よくまとめた時に、使徒としての召しに気付いたという。彼は牧師には召されていなかったが、他の指導者たちを教えることに向いていると認識したのである。60年代後半から70年代にかけて世界宣教を学んだ後、(アメリカで流行したと彼自身が語る) 教会成長を教えるためにフラー神学校に呼び戻されたという。その生徒のひとりがクエーカー教徒のジョン・ウィンバーであって、ワグナーは彼と1975年に出会い、彼を自分の相談役として雇ったのであった。

ワグナーがキャリアの方向性を変えるときには、彼はそれを“パラダイム・シフト”と表現する。「統計やグラフ、チャートを用いることはまだ霊的ではなく肉的であると見られていた...一方で当時このパラダイムを変えるのは容易ではなかったのだ」 (p.103)

マスターズ・カレッジの創設者でグレース・コミュニティーチャーチの牧師でもあるジョン・マッカーサー (*John MacArthur*) を彼は最も注目に値する論敵のひとりだと語っている。マッカーサーが彼の著書「福音の恥」という本を書いたのはこの世的な実存主義を用いたワグナーを叱責するためであったと語る。「マッカーサーのパラダイムは明らかにシフトに対応し切れていなかった！」(p.104)

“ウィンバーの時代”

このジョン・ウィンバーに関する章では、その時代に彼が平凡な者からスポットライトを浴びる存在になったというキャリアを掲載している。ウィンバーのもとで彼に起きた新しいパラダイムは、御霊の賜物が終わったという終結論から、賜物が今も継続しているという考えだけでなく、賜物が神学校の教室で習い、教えられるものであるという考えに変化したことだった。このようにフラー神学校で“しるしと不思議”の講義が始まったのである。—賜物の活かし方を学ぶことは「MC510：しるしと不思議、教会成長」と分類され、ウィンバーが“クリニック”と呼ぶものの中で生徒に単位3つを与えたのである。

ワグナーの論理付けによる教会成長原則へのこだわりと、そこからもたらされたものは、彼がウィンバーの弟子となり、自分の授業で彼に教えさせたことに大きく関係しているように見える。「私は彼（ウィンバー）の牧師としての洞察力、その経験、教会成長原則への抜け目のない分析に及ぶ者は他にいないことを良く知っている。私はジョンが勝者だということを知っているんだ。...彼はたいてい私より優れた評価を得ていた。私はそれを喜んでいた」(p.125)

ワグナーは学位として終身制の教授職を得ていたのに対し、ウィンバーはそのような資格を持っていなかった。ワグナーの名前は認証評価を得るために雑誌に登場していたが、実際はその活動を仕切っていたのはウィンバーなのだ。ワグナーは典型的な3時間の授業の様子を説明している。

「ジョンは『ここに来てください』と言って、教室のほうを向いている椅子に私を座らせた。...ジョンが祈り始めると、私は暖かい毛布のような力が私を覆うのを感じて、私の意識が部分的に分離するようになった。私はそこで語られていたことばの大半を聞くことはできたが気にはしなかった...私は御霊によって圧倒されているということにその時気付いていなかったが、今はその時自分が圧倒されていたと分かる。私が倒れなかったのは椅子に座っていたからなんだ。ジョンは私の身体的な変化を、まるでスポーツ解説者が解説するようにひとつひとつ報告していた。『ほら、まぶたが落ち着かなくなってきたら。ほら顔の横側が赤くなってきている！そうだくちびるも—震えてきている！感謝します、

主よ！さらなる力を！』(p.128)

ワグナーはそこで彼の高血圧が癒されたと主張している。このアカデミックな癒しはワグナーが“異言の賜物”を受け取ったときと大して変わりはない。第一コリント 14 章を学んでいるとき、「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝しています」という使徒パウロの言葉を読んだ。そして「もしパウロが出来たのなら、私に出来ないことはないはずだ」とワグナーは考えたのだった。(p.116)

彼は次に異言で祈るという実験を試し、それが本当に容易いものだと語っている。彼は今や異言の話し手となったため、終結論者の仲間たちとは別れなければならなかった。ワグナーは彼らを「宗教の霊」につかれた者として見ていたからだ (p.117)。彼は異言で語らない者を見ると彼が過去そうであったように頑固な者だと決めつけていたことだろう。

今や彼は師匠のジョン・ウィンバーのように自分の意思によって“やっつけのける”ことができるようになったのだ。彼らは“やっつけのける”ことが人を教会に誘うための素晴らしい手段だと考え、それが教会成長原則の業績となると考え始めた。ワグナーによると統計ではラテンアメリカの 70 パーセントの教会がペンテコステ派であるという。それに気付いた彼はそれを利用しようと心に決めたのだ。

ワグナーはカルバリーチャペルのチャック・スミス (*Chuck Smith*) とウィンバーが仲違いしたことをそれとなく言及している。しかし彼はカルバリーチャペルがシンプルに聖書を節ごとに教え、主の再臨の近さを強調し、真正の御霊の賜物を用いることによって飛躍的な成長を遂げたことを触れていない。羊たちを神のみことばで養うことは、ワグナーとウィンバーが大して気にするようには見えないひとつの“教会成長原則”である。

「ウィンバーが導いていた家庭集会是」と彼は語る。「1977 年にチャック・スミスの影響のもとカルバリーチャペルに属するようになった。しかしその 2 人の指導者の関係は初めからぎくしゃくしていた。1982 年になると両者は違う道を進むことに同意した...ジョンがカルバリーチャペルから抜けるやいなや、他の 30 のカルバリーチャペルの教会がヴィンヤードに入ったのだ！」(p.124-125)

今や乗っ取られた状態のカリスマ派ムーブメントを説明するのにワグナーは「第三の波」という言葉を造語した。それは荒れに荒れたヒッピーたちの上に望んだ聖霊の真実の運動として始まったが、賜物を真似るように定式化され、他の者にもそうするように教えるようになってしまった。その偽物のムーブメントは、ワグナーは偽物とは気付いていないようだが、さまざまな教派やローマ・カトリック教会に広がり、それは後に「カリスマ派の

刷新」として知られるようになる。

オカルト的教えである内なる癒し（インナーヒーリング）運動はアグネス・サンフォード（*Agnes Sanford*）やジョン、またポーラ・サンフォード（*John and Paula Sandford*）らの偽教師によってヴィンヤードチャーチの中で流行した。それはまた「第三の波」に欺きの霊を招くこととなった。この内なる癒し運動という異端に気付かず、ワグナーはこの間違った教えをフラワー神学校のチャック・クラフト（*Chuck Kraft*）の学びから受け入れた。これがまた解放のミニストリーへのパラダイム・シフトを生み出すことになるのである。

ワグナーとウィンバーは霊の戦いに関する意見の食い違いで1991年に仲違いすることになる。ワグナーはシンディー・ジェイコブスの考えを採用するようになり、天にある諸々の主権や力に対する支配力を握るのは教会次第だと考えるようになる。一方でウィンバーはそれほど思い上がった見解を持っていなかった。

キリストが地上で千年間支配されることの否定

ワグナーは彼の最も大きなシフト（変化）として、イエス・キリストがすぐさま戻って来るといふ期待を否定している。

「現実逃避の終末論から勝利を得る終末論へのシフト。この最近のパラダイム・シフトは長い時間がかかった。...私が支配する権威を理解し始めた時、終末観を見直す必要があるのが明らかになった。ハロルド・エベール（*Harold Eberle*）とマーティン・トレンチ（*Martin Trench*）の勝利主義的終末論を読んだ時、私に光がさした。部分的な過去主義（*preterism*）という立場、それが今私の信じていることだ」（p.273）

彼の“支配する権威”はもはや、過去主義によって、前千年王国説信奉者や“神の国は今”を信じている者が言うイエスの到来の備えとはならないパラダイムへと導かれた。ワグナーの流行によって変化を続けるヴィジョンは今——彼の仲間である現代の使徒たちや預言者たちが座る——七つの山に象徴されるこの世に神権的支配を打ち立てることである。ワグナーはそのアイデアを仲間のランス・ウォルナウ（*Lance Wallnau*）から得た。彼はその七つの山を、①宗教、②家族、③教育、④メディア、⑤政府、⑥芸術とエンターテインメント、⑦ビジネスと言いつけている。（p.263）

聖書中で唯一誰かが七つの山に座っている箇所は黙示録の17章である——そう、大淫婦だ。ワグナーのグループ、新使徒改革（NAR）の将来を預言的に垣間見ると、偽りの宗教者となつながら持つように発展していくことが分かる。

“ジェイコブスの時代”

ワグナーは彼の友人であり、共謀者であるシンディー・ジェイコブスのために一章全体を割いている。ジェイコブスが彼の神学の発展に寄与した点は、霊の戦いについての彼女の理解である。1990年にジェイコブスとワグナーは霊の戦いネットワーク (*Spiritual Warfare Network*) を形成する集会に集まった。最初の会合にはチャーチ・オン・ザ・ストレイのジャック・ヘイフォードや、クリスチャンが悪霊に憑かれ得る、またすべての病は悪霊からのものだというような偽りを教えている「ピッグズ・イン・ザ・パーラー」を書いたフランク・ハモンド (*Frank Hammond*) などの著名人、またエンドタイム・ハンドメイデンのグウェン・ショーなど、偽預言者の集まりでいつも活躍していた者たちなどであった。

ワグナーはその集まりから霊の戦いの総合的な理解を得、それは後に「霊的地図」と呼ばれるものへと発展していくことになる。それは預言者たちと使徒たちがその地域に働いている主権や力を特定し、それらの上に権威を取り、よみに行くように宣言するというもの——またはその地域の人たちが福音に対して心が開かれるよう別の場所に行くようにするというものだ。当然ながらこのようなアイデアは聖書から出てきたものではなく、ワグナーとその仲間たちの高慢な見解から出てきたものだ。彼はこのアイデアを自分に教えた人物として2000年運動の指導者ルイス・ブッシュ (*Luis Bush*) を挙げている。彼はローザンヌ世界伝道国際会議に関わっていた。ワグナーはビリー・グラハム (*Billy Graham*) が旅費を負担してでも、彼とその仲間たちをローザンヌ会議に参加させようとしたと語る。

シンディー・ジェイコブスはさらに物事を発展させ、ワグナーに預言して言った。日本の人々がキリスト教を受け入れるようになるために、「帰属者としての悔い改め」として、「第二次世界大戦で核兵器を投下した罪を悔い改める」必要があると語った。そのために彼は東京におもむき、チョー・ヨンギ (*David' Yonggi Cho*) とステージを共にそれを実行したのである。

ジェイコブスの預言は部分的にはこうであった。「主よ、ピーター・ワグナーを日本に送ってください...広島と長崎で行われた残虐行為を撤回するために。父よ、日本という国に対して働いているサタンの暗やみを打ち破るために、ピーターを御霊の核兵器として用いてください」(p.235)

ワグナーが言うには、シンディーが預言するとき、彼女はいつもトランス状態になり、おかしい顔になるという。私は実際彼女の変貌した状態を目にしたことがあるが、確かに彼

女の顔は邪悪な様相を帯び、低くうなるような声で話し始めていた——それはとても寒気がするものであった！その霊に何の聖いところも無いのだ。

使徒の継承

ピーター・ワグナーのキャリアを通して、次から次へと別のパラダイムへ影響を与えた人は非常に多い。彼は多くの名前を挙げているがそこには

ポール・ケイン：同性愛者として追放されたカンザスシティの預言者のひとり。ワグナーは彼を預言者と呼び、ウィンバーに出会う日のしるしを約束したという。その日には震度5の地震があったという。(p.192)

チャック・ピアース (*Chuck Pierce*)：ワグナーは彼の名前にちなんである時代に名を付けている。彼の著書でワグナーが選んだ写真はピアースが東洋宗教の服装をしているものだ。ピアースは神として一人称で語る自称預言者として知られている。ある時ピアースは預言した。「神は言われる。『私は私の民の再編成の時を始めている。私は彼らの思いを組みなおす...私は私の権威をこの地上に創造しなければならない...私はこの再編成をもってこの年を始めよう』」(p.227) ワグナーは疑問を持っていないようだが、神はいつ地上での権威を失われたのだろうか？これはとんでもない冒涇だ！

ビル・ハモン：「預言者と個人預言」という本の著者であり、ワグナーから使徒としての認証を受けた。ワグナーは現代の預言者を理解できるものとしてハモンの本を推薦している。ワグナーはハモンを「私にとって遠くにいる英雄」また「際立った人格」を持っていると語る。しかしワグナーが表に出さないことは、ハモンが数々の偽預言の歴史を持っていること、1997年5月にはフロリダ州に悪が無くなるというような尊大な宣言を行っていることである。

テッド・ハガード (*Ted Haggard*)：彼は米コロラド州のコロラド・スプリングスでワグナーの協力者として一度触れられている。ニューライフ・チャーチの施設をワグナーのミニストリーのために開放したことがある。ワグナーは全米福音者協会 (*National Association of Evangelicals*) の元代表であり、スキャンダルに発展したこの両性愛者とは仲違いした。ワグナーはスキャンダルについては多くを語らなかったが、ハガードが「私たちの使徒的・預言的なキリスト教の潮流になじまなかったため」彼を好まなかったと語る。(p.228)

第二の使徒的時代

ワグナーは自分が「第二の使徒時代の幕開け」を目撃した、超越した使徒であると確信している——第一の使徒時代は第一世紀の本当の使徒の時代である。彼はその新しい使徒的時代の幕開けを 2001 年とし、彼が自ら「普及率」と呼ぶものを達成した後、クリスチャンと公言する未知数の人たちが、彼と共に使徒と預言者が教会の礎であることを同意しているという。(p.218)

聖書を信じるクリスチャンなら誰しも、教会の基礎は 2 千年前に据えられたのであって、教会時代が終わりに近づくにあたり、神の建物の完成のために新しい基礎を必要としないことは明らかに分かる。

ワグナーはローマ・カトリック教会を引き合いに出して「使徒の継承」が起こらなければならないと教える。彼は今や 80 代後半であるため、彼亡き後誰が使徒の跡継ぎになるかということを決定している。カトリック教会の使徒的継承なら一度にひとりの教皇が入れ替わるだけだが、ワグナーの場合は彼が去った後に群衆に自分の外套を運ばせようとしている——言い換えるとそれほど彼が大事な存在だということだ。彼は一章全体を“移行”という問題に割り、彼の亡くなった後、誰が何の権威を相続するかを書きだしている。

ワグナーはその使徒的ムーブメントが 20 世紀半ばの後の雨運動にさかのぼることを認めている。彼はその頃の者たちを“先駆者たち”と呼んでいるが、個人の名前を挙げることはしない。それは彼らがみな異端として信頼を落としていることを知っているからだ。もし彼がウィリアム・ブランナム (*William Branham*) などの名前を挙げようものなら、人々から返り討ちに遭うだろう。ただグーグルで検索してみるだけで、ヨエルの軍隊やマニフェスト・サンズの教理がいかにねじ曲がっているかは明白である。

ワグナーはこの分析でカバーしきれないほどの多くの組織を率いている。彼は教会史のどの時代の“キリスト教指導者”よりも多く自分を誇示する団体を創設している。また目に付いたおかしい霊的流行すべてに追随している。そしてそのような流行にもっともらしい名前を付けて正当化しているのだ。彼が楽しみとしている時間は友人たちと蛇を飼っているような教会に行き、ガラガラヘビと踊る狂った人たちを見ることだという。

彼の狂ったような宣言は、狂牛病を終わらせるというものから、新しい使徒の手により富に変わるという霊的な金の粉をつかむこと、また短い脚を長くすることにまで及ぶ。

彼は自分の回顧録を閉じるにあたって、自分の達成したことを最も適切ではあるが、みっともない仕方で終わらせている。「私はトイレトペーパーの紙のようなものだ——終わりに近づくとつれ、早く無くなっていく」(p.284)

本の終わりには彼がその“キャリア”の中で書いたすべての本の要約を載せている—73 の著書の中には「鳥の神を打倒せ (*Defeat the Bird God*)」や「現代のしるしと不思議 (*Signs and Wonders Today*)」、「暗やみの天使との格闘 (*Wrestling with Dark Angels*)」、「敵を手中に収める (*Engaging the Enemy*)」、「霊の戦いの祈り (*Warfare Prayer*)」、「使徒的教会の到来 (*The New Apostolic Churches*)」、「教会成長のかぎ (*The Everychurch Guide to Growth*)」、また「教会地震 (*Churchquake*)」などという本である！それは私たちが知っているように新使徒改革がいかに教会を“揺るがして”いるかを説明してくれている。

トイレの紙が無くなった時に、ひとつ手に取ってみてはいかがだろうか。